

ともしび
共生委員会ニュース

2018 年度　3 号

2018 年１０月１日版

グローバルウィークⅡ「Get Connected」
～ コミュニティ再生 ～

今年度第２回のグローバルウィークは「Get　Connected」と題して、高等部の様々な取り組みや、社会／世界と向き合うことについて考えるプログラムが用意されています。

礼拝・昼休み・放課後と、数多くの機会がありますので、皆で参加し、考えを深めましょう！

現時点でプログラムに参加した人はもちろん、その周りの人、今後こういった取り組みに参加してみようと考えている人、これまでこういったものに触れる機会が少なかった人…皆さんの参加を積極的な参加をお待ちしています。

（上の写真は、昨年度１０月の「磯とろろ試飲会」）

月	日	曜日	礼拝	お昼休み		放課後	
10月	1	月	「声なき者の友」の輪 神田英輔先生	タコツボ社会の中でお互いを 意識し合う同調圧力を 体感するワークショップ	西校舎2F 大会議室		
	2	火	HR309 M.T.	みやこ訪問プログラム 報告会	西校舎2F 大会議室	宮古を通して、コミュニティ 『再生』を考える座談会	西校舎2F 大会議室
	3	水	元国連職員 山本和先生	2018年度フィリピン訪問 プログラム説明会	西校舎2F 大会議室	国連元職員のお二人による GLOBAL WORKSHOP 国際機関による平和構築と コミュニティ再生	西校舎2F 大会議室
	4	木	HR304 Y.K.	生徒自主学習団体ブルーペコによる 東ティモールコーヒー試飲会	ウッド デッキ	青学大　地球社会共生学部との 東ティモールvsタイ コーヒーで村おこし ディスカッション	西校舎2F 大会議室
	5	金	英語科　ベリー先生	青学大チャットリーダーと話そう！ SPECIAL BIG CHAT ROOM	西校舎4F 大教室	青山セカンドチャンスによる ノーモア食品ロス ゲームワークショップ	西校舎2F 大会議室

Aoyama Second Chance の取り組みについて

HR303　N. T.

私たち Aoyama Second Chance (ASC)は日本の食料問題について深く考え、少しでも解決に近づけられるよう取り組んでいる団体です。そもそも日本におけるそれほど重大な食料問題とは何なのか、皆さん想像がつかないと思います。しかし、実は日本人の約 6 人 1 人(約 2000 万人)が貧困線以下で暮らしている現状があります。そのうえ、日本の貧困率は年々上昇傾向にあるのです。このような現状がある一方で日本は食品ロス(本来食べられるにもかかわらず捨てられている食料)の問題も抱えています。実に日本国内では、年間の米の生産量(839 万トン)とほぼ同じ割合である 500~800 万トンもの食品ロスがあります。以上の 2 つの食糧問題の要因は様々で、日本の食料問題は深刻となっているのです。

そこで私たち ASC は、まだ食べられるのに様々な理由で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人に届ける活動(フードバンク)によって食料が不足している部分と余っている部分との架け橋となる役割の手助けをしています。また、私たちがフードバンク活動をする上で参考にしているのが「セカンドハーベストジャパン(以下:セカンドハーベスト)」と言う日本で初めてフードバンクを始めた団体です。「セカンドハーベスト」は食品製造業者、卸店、輸入業者と提携し、余剰食料の寄付を促し、その食料の貯蔵や必要な人への配達をする、言わば「食の仲介人」のような役割を担っています。このような団体を参考にすることによって、私たちは今、何ができるかを考えています。

私たちはセカンドハーベストを参考、また、協力すべく、家庭から寄付できる加工食品を学校で集める活動(フードドライブ)を昨年実施し、この結果、22kg もの加工食品が集まりました。このフードドライブの活動は学校全体で食料問題に取り組むことができるため、今後も実施したいと考えています。

また、私たちは 7 月にセカンドハーベストが行なっている炊き出しに参加しました。この炊き出しは毎週土曜日に上野公園で路上生活されてる方に 3 日ほどの食料と手作り弁当を渡すボランティアです。そこで私達はボランティアの大変さを身を以て体験しました。暑い中一人一人にお弁当を手渡しし、下準備から後片付けまで全て自分たちでやる大変さと自分はほんの少ししか役に立ってないという無力さ、でも確実に人の役に立っているという達成感で半日のボランティアはあっという間に終わりました。この日を境に私たちにとってのボランティアが「簡単に手伝えそうな支援」から「微力ながらも人のためになる支援」へと変わりました。私たちは今後もセカンドハーベストが行なってる様々なボランティアに積極的に参加して行きます。

以上のフードバンクやフードドライブ活動、またセカンドハーベストのボランティアに参加してみたい高等部生を私たち ASC は常に募集しています！



2017 年度の活動の様子

東日本大震災から学んだこと

HR310　N. S.

皆さんは２０１１年３月１１日のことを覚えていますか？東日本大震災は、最大震度７の強い揺れと国内観測史上最大の津波を伴い、東北・関東地方を中心とする広い範囲に甚大な被害をもたらし、また日本各地で電話やメールが不通になるなど様々な混乱が起きたので、多くの人の記憶に残っていることでしょう。私たちは、７年半前の被災地の状況はメディアを通して知ることが出来ましたが、７年半経った今日ではメディアで取り上げられる機会も少なくなり、直接現地を訪れないと情報を得ることができません。私は、マスコミの報道を鵜呑みにするのではなく、この目で現在の宮古市を知りたいと思い宮古訪問プログラムに参加して３つのことを学びました。

１つ目は情報の不正確さです。気象庁が最初に出した警報の津波の高さは、岩手県は３メートルとされていましたが、実際には４０メートルもの高さに及びました。宮古市の人々の多くはこんなにも高い波が町を襲うなど考えもしなかったことでしょう。私たちが今回訪れた宮古市田老地区は過去２度、明治と昭和に大きな地震と津波がありました。そのため、町には津波記念碑が建てられるなど、後世に津波の恐ろしさと避難の重要性を伝える取り組みや、交差点の隅を大きめに切り取ることで見通しを確保し、災害時に円滑な避難行動が出来るような取り組みがされていました。それでもなお、多くの方々が犠牲になったのは誤報を信じてしまったからだと思います。こうした情報が全て正しいという固定観念を持つことは、たいへん危険なことだと学びました。

２つ目は行動する力の大切さです。災害当時、日本中から支援物資が届きましたが、道路が封鎖されていたために避難場所まで物資を運ぶことが困難でした。しかし、そこで立ち上がったのは地元の中学生だったとお話をお聞きしました。大人たちが災害に混乱する中、自分たちに何か出来ることはないかと自ら役場を訪れて活躍したそうです。何事も言葉で表すことは簡単ですが、実際に行動するには大きな勇気が必要です。私自身、被災地に訪れたいと思いながらも、今回訪れるまでに７年が経ってしまいました。しかし、もっと早く訪れていれば良かったと後悔しています。何か行動することに悩んでいる人は、一歩踏み出す勇気を出してもらいたいと思います。

最後の３つ目は復興の難しさです。目に見える建物などの物質的なものは復興が進んでいるように感じましたが、目に見えない心の面はまだ復興していないように思いました。私たちは、宮古市の集合住宅に住むお年寄りから、宮古北高校の同世代まで多くの人とお話しましたが、どなたも話が終わると「話を聞いてくれてありがとう」と、ただ話を聞いただけの私たちに感謝してくださいました。心の復興にはまだまだ長い月日が必要ですが、私たちに出来ることはたくさんあると思います。

私は、宮古訪問プログラムで多くのことを学びました。この話は私個人が宮古市について知って考えたことでしかありません。復興という大きな課題には日本中が取り組む必要があります。また、未来で多くの被災者が生まれないためにも後世へ伝えていかなければなりません。この問題について皆さんにも現地に足を運んで考えてもらいたいと思いました。





ボランティア部を振り返って　～やってみること～

HR301　T. S.（ボランティア部部長）

世の中には「やり損」という言葉があります。私も今まで何回か口にしたことがありますが、この学校でボランティアをしていて、やり損より何倍も多く口にした言葉があります。それは、「やらない損・行かない損」という言葉です。「～ない」に損を付けてしまった言葉なのですが、今まで活動をしていてこの言葉をとても強く感じました。ボランティアという言葉を聞くと、大変そう・面倒くさい・疲れる。などのイメージが出るかもしれません。そんなイメージから活動に消極的になってしまっている人も多いと思います。それこそ「やらない・行かない損」なんです。やらない・行かないから、現場でやった充実感や行った楽しさがわからないのです。そして「その充実感や楽しさを、実際に体験しないなんてどれだけ人生損をしているんだろう？」という思いでいつもこの言葉を使っていました。そんな大袈裟な。と思うかもしれませんが、本当にそう思っています。私はボランティア部の活動に参加して、「この世界にはまだまだ知らないことがたくさんあるんだ、いろいろな考えがあるんだ、いろいろな生き方があるんだ。」と感じました。目の前には新しいことばかり広がっていました。

例えば恵比寿で行われる『えびす青年教室』では、月に一度知的障害を持っている方々と様々な活動をします。「障害を持つ持たないの壁を超えて同じ活動をする。」そこにはどこまでサポートをするべきか、どのようにコミュニケーションをとるべきか。そんなことを考える必要があったりします。また、みなさん十人十色でそれぞれの仕事をし、好き嫌いがあり、考えがあります。障害を持つ方と同じ時間を過ごす。私が一番影響させられた活動です。そして横浜市の寿町で行われる路上生活者に向けた炊き出しでは、路上生活者(ホームレス)問題についてとても考えさせられました。

そんな世界にもっとたくさん行きたい、学びたい。と思い、何度も部の活動に参加するようになりました。この 3 年間の私の経験は大きな財産となりました。何もしないでいたら、私は何も得ることができないまま無駄な 3 年間を過ごしていたと思います。行動を起こすようになったからこそ今の私があります。

もう一つ、行ったからこそわかったことがあります。それは、人との交流です。みなさんボランティアの「活動」にばかり目がいっていませんか？活動をするにはそれを運営する人がいるし、他に参加する人もいて、たくさんの人が関わって成り立っています。そんな人たちと顔見知りになりいろいろな話をするようになるのは、すごく楽しいし、私が活動に興味を持った要因の一つでもあります。ただ「活動」が大変そうなどではなく「人」が関わっているものだということを知ってほしいです。

しかし私たちの活動は運営する方々がつくった土台の上で踊っているようなものです。高校生の活動なんてそんなものかもしれません。でもこれでボランティアを知れたと思うのはとても甘い話だと思います。世界には様々な問題があります。書き損じハガキや古切手を集めることでアジアの貧困のための支援につながったり、今年は西日本豪雨や北海道胆振東部地震の募金を行なったりとボランティア部でも活動をしていますがそれは世界の問題のほんの一握りです。最後まで読んでくれたみなさんもまずは身近なことから動いてみて、ボランティアに興味を持って頂けたら嬉しいです。

